

なることが確認された。この黒褐色土をリン・炭素分析した結果、地山試料の1.51～1.59倍多くリン酸を検出した。人骨や木棺は出土していないが、SZ63やSD37と帶状分布が重なることなどを積極的に解釈すれば、これらの長方形土坑は土葬墓の可能性がある。遺物は古代の土器片が少量出土しているが、SE94の手前で途切れることから、SE94に近い時期の土葬墓と考えられる。SK44・45はその並列する様子から、双墓として捉えられる。

以上の中世遺構は、井戸跡SE94・長方形土坑群（SK44・45・93等、土葬墓）→SD37・SZ63（火葬墓）・円形土坑群（SK09・52等、火葬土坑）への変遷があり、SZ63はさらに古・中・新段階に細分される。変遷の契機はSE94の廃棄にあり、この段階で長方形土坑群（土葬墓）の造営が終わり、火葬墓へ変化している。掘立柱建物跡SB03、柵跡SA02・130はこれらの遺構の北面に近接し方位も揃うことから、出土遺物による時期の特定はできないものの、いずれかの段階に伴う可能性がある。SZ63の集石墓が古段階から新段階へ主に南側へ展開していく様子から、墓の正面が北側にあると考えられ、SB03は墓に関連する簡素な覆屋であろうか。

中世の集石墓は、上市町黒川上山古墓群（上市町教委2005）や南砺市香城寺惣堂遺跡（福光町教委1993）といった丘陵部の信仰遺跡の例を除けば、県内平野部での事例はそれほど多くなく、富山市内では堀I遺跡（婦中町教委1996）・安養寺遺跡（富山市教委1998）などがある（第40図）。黒川上山古墓群では12世紀後半～15世紀にかけて墳丘墓が多数造営され、その周囲に集石墓が散見される。2.0mを超えるものもあるが、57～59号墓などは本遺跡に近い規模である。蔵骨器は確認されていない。堀I遺跡は13世紀中頃～14世紀にかけての配石墓とされるもので、区画石の内側に礫を積むものと土を盛るもの（配石墓II-1・2）がある。蔵骨器は珠洲ないし八尾が想定される。氷見市宇波ヨシノヤ中世墓群（氷見市教委2014）は石動山信仰との関わりも想定される丘陵上の遺跡であるが、SZ2・3は50～60cm四方の石組内部に礫が充填され、SZ3の内部から火葬骨が出土した。14世紀後半頃とされるが蔵骨器は確認されていない。SZ3は蔵骨器をもたない、直葬か有機質容器を使用した事例である。これらの遺跡と比べれば、本遺跡SZ63は、集石墓の石組がやや崩れているものの、蔵骨器の原位置を推定できる事例があり（集石6）、大小の集石の存在が想定されるなど、集石墓の構造の一端を知ることができる。また土葬墓から火葬墓への変遷を追える可能性があり、県内の中世墓の動向を探る貴重な資料といえる。

中世墓 SZ63の境界性

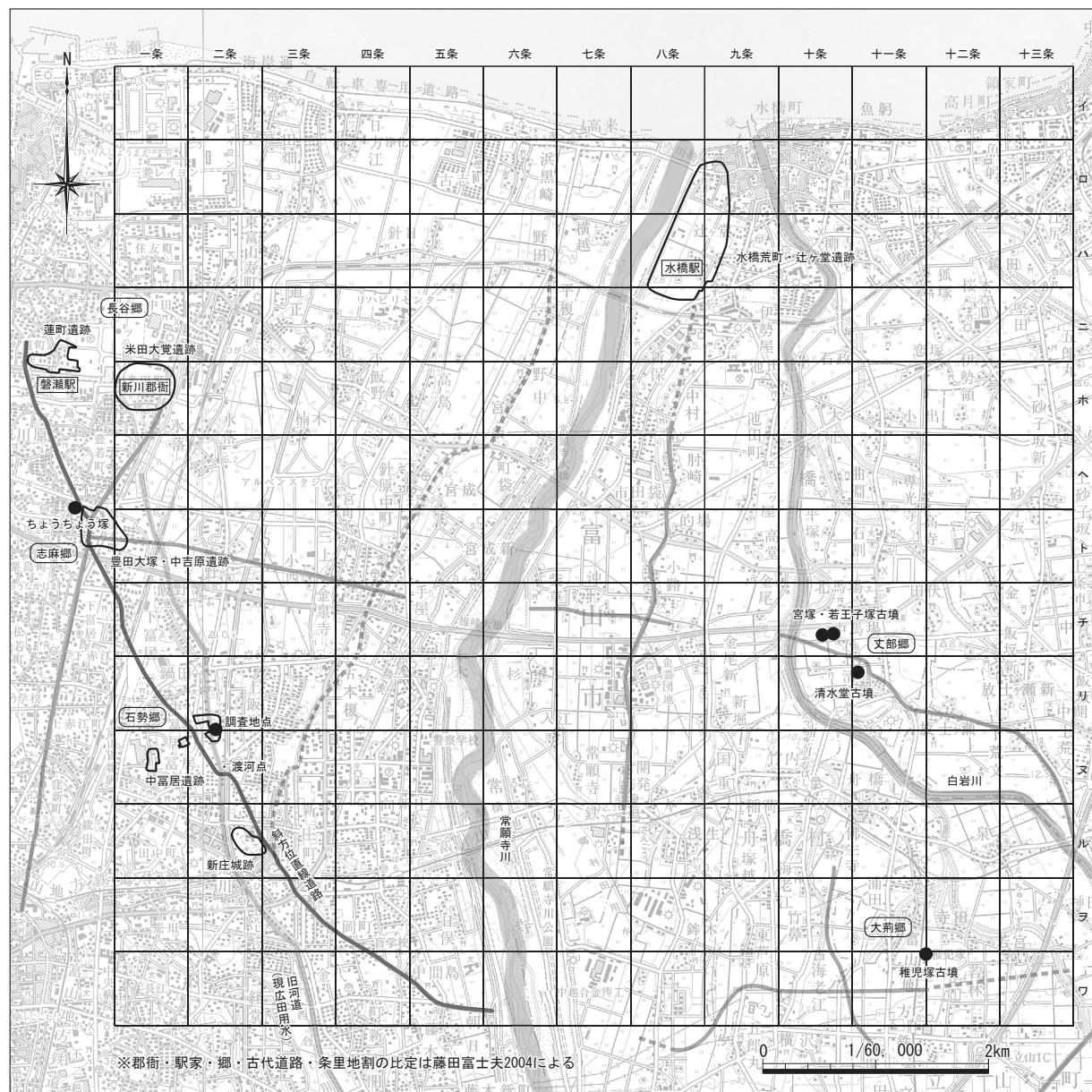
SZ63及びその関連遺構は、南北幅約3.0mの範囲を東西方向の帶状に分布している。この帶状の範囲は、現代の水田の畦道直下にあり、幅や方位が畦道と完全に一致している。この畦道は水田の畔としてかなり幅のあるもので、少なくとも1961年の航空写真まで遡って確認できる。中世墓地が水田区画の境界線として現代まで遺存したことを示している。それは遺構検出面であるV層の、水田面下の青灰色に対し、畦道の下では赤みを帯びるという色調の違いとして明瞭に現れていた。

中世墓地の境界性に関する研究では、中世の葬地や墓地が莊園などの境界地点に数多くみられる事実が指摘されている（高橋2004）。境界地に墓地が営まれた事実だけでなく、その境界にどのような背景が存在するのかを検討する必要がある。

ここでは藤田富士夫氏による越中国新川郡の推定条里地割を引用し、SZ63が同地に選地した経緯を探りたい（第41図）。藤田氏は、越中国東大寺領莊園開田図が残る大藪莊を立山町浦田付近に比定し、神護景雲元年（767年）開田図にある「庄所」に5世紀初頭の巨大円墳である稚兒塚古墳が存在するとした（藤田1998）。その後、新川郡衙を富山市米田大覚遺跡に想定するなかで、新川郡の条里の起点を米田大覚遺跡と蓮町遺跡周辺に求めた（藤田2004）。稚兒塚古墳が神護景雲開田図の十一

条・十二条の条境にあり、また稚兒塚古墳の北側に里境が描かれることが基準とされている（藤田2001）。1町が109mとし、1条ないし1里は654m（6町）となる。稚兒塚古墳の北側を起点に654mごとのラインを引くと第41図のような条里地割となる。藤田氏が地域表象としての性格を重視するちようちよう塚古墳も、里境の西側延長線上に位置することが分かる。ところで稚兒塚古墳から3里（1,962m）北の里境がちょうど中富居遺跡の今回の調査地点を通過することが注目される。次に今回の調査における古代の遺構を確認しておきたい。

古代の遺構は、南北方向の小溝群が古いものである。A群とした8世紀後半を主体とする一群は、調査区東側の低地部分にある。調査中の湧水の多さからは想像できないが、好気的な環境を示す珪藻化石が卓越することから、小溝内が日常的に乾燥した状態であったという分析結果（SD82）が得られており、周辺の畠地利用が想定される。続く9世紀前半を主体とするB群は、西側の微高地へ中心を移しており、東側の低地部分が畠地として不向きな環境に変化した可能性がある。これに関連し



第41図 古代新川郡西部域の推定条里地割

て、調査区の40 m西に江戸時代に開削された広田用水の存在がある（第41図）。常願寺川で取水された常西合口用水が新庄排砂水門で分水されるものである。暴れ川として名高い常願寺川はたびたび流路が変化しているが、この広田用水の流路が奈良時代の河道にあたり、平安時代には現在の太田用水の流路に変移したとされている（熊野校下自治振興会 1989）。調査区西側の微高地はこの常願寺川旧河道の自然堤防に相当すると考えられる。中富居遺跡は平安時代のある段階で、常願寺川の離水という大きな環境変化に直面したことになる。その結果、旧河道が沼沢地と化し、周辺の排水性が悪化した可能性がある。元来、本遺跡周辺は常願寺川の形成した扇状地の扇端部に立地し、湧水の豊富な地域であるが、常願寺川に流入していた水が停滞するようになったのではないか。9世紀前半の畠跡（B群）が微高地寄りに占地を変えたことは、水位の上昇という環境変化に対応したもので、その後の9世紀後半には畠としての利用の痕跡がみられなくなる。中富居遺跡の平成10年度調査においても同様の溝群が検出され、畠跡と考えられる（富山市教委 1999）。この溝群も9世紀初め～中頃を主体と



第42図 地形分類図（分類は国土地理院電子国土 Web 治水地形分類図更新版（2007年以降）を基にした。）

するが、9世紀後半に継続せず、周辺には沼沢地の広がりが想定される。その後、本調査区の東側低地部分は畠跡の上にIV層が堆積するようになり、微高地との高低差が半減してくる。この段階で東西方向の溝 SD01 が開削される。最大幅 1.35 m の SD01 は、やや蛇行があるものの概ね SZ63 関連遺構の帶状分布やその上の畦道に並走している。この SD01 が、前述した推定条里地割の里境にあたると想定している。調査区付近は扇状地を斜行する常願寺川の旧河道沿いにあり、その地形的制約のため、正方位の地割にならない可能性がある。調査区付近の常願寺川旧河道(広田用水)の方位は N-9° -W を示し、SD01 はそれとほぼ直交する N-77° -E を示す。おそらく畠作が不向きになった 9 世紀後半以降、水田として周辺地域を再開発する際に、旧地形の影響を受けながら条里制地割を採用したと考えられる。SD01 出土遺物はいずれも細片ばかりで 8 ~ 9 世紀の遺物が混在するが、柱状高台の土師器 (13) が 11 世紀まで下るものであれば、その頃までは確実に SD01 が存続したことになる。

藤田氏は蓮町遺跡から南東へ延びる斜方位直線道路を古代北陸道の駅路に想定し、和名類聚抄にある石勢郷を中富居遺跡周辺に比定した(藤田 2004、第 41 図)。この斜方位直線道路は奈良時代の常願寺川を中富居遺跡の南方で渡河している。奈良時代の常願寺川は、新川郡衙と想定される米田大覚遺跡と、郡衙に関連した祭祀遺跡である豊田大塚・中吉原遺跡の東辺を北流し、日方江で富山湾へ注いでいた(第 42 図)。当時の常願寺川が水運として利用できるのであれば、陸路と水路で郡衙と連結する中富居遺跡付近は、交通の要衝として重要な位置を占めたであろう。なお中富居遺跡と斜方位直線道路で南東 1km の近距離に位置する新庄城跡では、平成 25 年度調査において、円面硯を含む 7 ~ 10 世紀の古代遺物が多数出土している(富山市教委 2014)。なかでも一辺が 1.0 m を超える掘り方の方形柱穴からなる大型掘立柱建物(2 × 2 間)の存在が注目され、石勢郷の範囲や中枢地を検討する際に考慮すべき遺跡といえよう。平成 10 年度の中富居遺跡で出土した墨書き器「庄カ」の解釈を含め、古代の中富居遺跡にはいまだ多くの課題が残る。

SZ63 と関連遺構は、以上のような条里地割の里境と推定した SD01 のすぐ南側に帶状に分布している。周辺は中世にかけても水田としての利用が続いたと思われるが、古代の条里地割が引き続き土地の境界として遺存し、そこに墓地が形成されたものと判断される。ただし SZ63 の下には井戸跡 SE94 が存在することから、未知の中世集落が近隣に存在する可能性もある。SE94 の掘り方と思われる、木組外側の埋土からは、13 世紀前半の土師器皿(31) が出土しており、井戸構築の時期を示している。SZ63 は 13 世紀前半以降のものとなる。SZ63 の出土遺物には 12 世紀代の龍泉窯青磁や珠洲 I 期の可能性もある擂鉢があるが、擂鉢内面の頗著な使用痕も加味すれば、これらの遺物は伝世品を藏骨器の蓋に転用したものと考えられる。出土量は少ないが、土師器皿(55 ~ 57) の形状や珠洲 III 期の藏骨器(59) の存在から、SE94 に続く 13 世紀後半が SZ63 の主体となる時期であろう。新段階集石 6 の藏骨器(59) 周辺の火葬骨を放射性炭素年代測定した結果、13 世紀後半から 14 世紀後半という年代が得られた。この火葬骨は人類学的報告では 1 体分とされており、複数体の埋葬ではない。年代測定の下限 14 世紀後半を集石 6 の造営時期と考える場合は、藏骨器(59) の伝世が想定され、SZ63 はおよそ 100 年間にわたって墓地として存在したことになる。SZ63 は条里地割を推定した SD01 を土地の境界として中世に引き継ぎ、周辺の開発を担った小規模な在地領主層の歴代墓所と考えられる。集石墓が重層的に造営されることは、先祖と同じ場所に埋葬することで子孫繁栄が約束されるという当時の思想に基づいたものであろう(水藤 1991)。SZ63 に先立つ長方形土坑群が土葬墓であれば、13 世紀後半に土葬墓に変わって火葬墓が導入されたことを示している。埋葬方法が異なる墓が同じ場所に占地することは、被葬者の階層差によるものではなく、同一階層における埋葬時期の差によるものと判断される。調査地点は扇状地扇端部から沖積平野への地形的な境界もあり、SZ63 は他地域の領

主に対して自領を明示する意味合いも併せ持ったかもしれない。時期は下るが、南砺市梅原安丸遺跡で検出された15～16世紀の火葬遺構や五輪塔が、旧西礪波郡福光町と東礪波郡福野町の郡境にあたる旧河道沿いに位置することも、中世墓地の境界性を示す事例といえよう（富山県財団1996）。

SZ63は出土遺物からは15世紀まで継続しないと判断され、墓地としての役割を終えたあとは、土地の境界ないし畦道として現代まで遺存した。一方で、15世紀前半には先ほどの新庄城跡で堀と土塁を伴った館跡が新たに成立することが判明している（富山市教委2014）。この館跡は「累代新庄ニ居住」（文政10年新川神社社号帳）した土着の武士三輪氏によるものとの推測がある（高岡2014）。のちの戦国期の新庄城跡が城の外側に常願寺川旧河道を取り込んで西の備えとしているように、新庄城跡と中富居遺跡は地形的にも繋がりが深い。新庄城跡の館跡（三輪氏か）を核とした周辺地域の再編が15世紀に生じ、中富居遺跡の墓地を造営した集団も、その影響を受けたのではなかろうか。

（常深）

引用・参考文献

- 上市町教育委員会 2005 『黒川遺跡群発掘調査報告書』
熊野校下自治振興会 1989 『熊野郷土史』
小林高範 1997 「3. 富山市米田大覚遺跡」『富山県埋蔵文化財センター所報』第60号 富山県埋蔵文化財センター
狭川真一 2011 『中世墓の考古学』高志書院
新上市町誌編纂委員会編 2005 「第四章 上市町の中世 第三節 土肥氏の興亡」『新上市町誌』
水藤真 1991 『中世の葬送・墓制』吉川弘文館
高岡徹 2014 「戦国期における新庄城と武将の群像」『富山市考古資料館紀要 第33号』富山市考古資料館
高橋一樹 2004 「中世莊園と墓地・葬送」『国立歴史民俗博物館研究報告 第122集』国立歴史民俗博物館
武田健次郎 1998 「富山平野における遺跡群の展開」『富山考古学研究』創刊号(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所『梅原加賀坊遺跡・久戸遺跡・梅原安丸遺跡・田尻遺跡発掘調査報告』
富山市教育委員会 1974 『富山市豊田遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 1984 『富山市飯野新屋遺跡発掘調査概報』
富山市教育委員会 1987 『富山市飯野新屋遺跡 主要地方道富山環状線工事に伴う古墳時代前期集落跡の調査概要』
富山市教育委員会 1990 「III 試掘調査 C 中富居遺跡」『平成元年度 富山市埋蔵文化財発掘調査概要』
富山市教育委員会 1994 『富山市宮町遺跡（平成6年度）現地説明会資料』
富山市教育委員会 1995 『富山市飯野新屋遺跡発掘調査概要』
富山市教育委員会 1998a 『富山市豊田大塚遺跡発掘調査概要』
富山市教育委員会 1998b 『富山市高島島浦遺跡 針原中町I遺跡 針原中町II遺跡』
富山市教育委員会 1998c 『富山市安養寺遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 1999 『富山市中富居遺跡 発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2000a 『富山市針原中町II遺跡発掘調査概要』
富山市教育委員会 2000b 『富山市小西北遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2006 『富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2007 「II 宮町遺跡」『富山市内遺跡発掘調査概報II』
富山市教育委員会 2009 『富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2012 「II 米田大覚遺跡」『富山市内遺跡発掘調査概要VII』
富山市教育委員会 2013a 『富山市豊田大塚・中吉原遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2013b 「I 宮条南遺跡」『富山市内遺跡発掘調査概要VIII』
富山市教育委員会 2014 『富山市新庄城跡発掘調査概報』
富山市教育委員会 2019 『富山市米田南田遺跡発掘調査報告書』
中村太一 2000 『日本の古代道路を探す』平凡社新書
氷見市教育委員会 2014 『宇波ヨシノヤ中世墓群』
広田校下自治振興会 1996 『広田郷土史』
福光町教育委員会 1993 『医王は語る - 医王山文化調査報告』福光町・医王山文化調査委員会
藤田富士夫・駒見和夫 1981 「ちようちよう塚の概要と若干の考察」『大境』第7号 富山考古学会
藤田富士夫 1998 「東大寺領大藪莊の現地比定と遺跡」『森浩一70の疑問 古代探求』中央公論社
藤田富士夫 2001 「東大寺領越中国莊園「丈部莊」の現地比定と若干の考察」『富山史壇』第135・136号合併号 越中史壇会
藤田富士夫 2001 「古代の表象としての若王子塚古墳」『富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
藤田富士夫 2004 「古代越中国新川郡の「道」と「郷」に関する若干の考察」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報 第2号』敬和学園大学
婦中町教育委員会 1996 『堀I遺跡 発掘調査報告』
古川知明 1995 「最新の発掘成果から」『富山市考古資料館報』No27 富山市考古資料館
古川知明 2020 「富山・稻荷砦の復元」『論集 富山城研究3』富山城研究会